

2025年度 沖縄大学
学校推薦型選抜

「管理栄養学科小論文」
問題用紙

2024年11月23日(土)
9:00~10:00

下の文章および図は等々力英美による「戦後沖縄における食事・栄養と食環境の変遷」からの抜粋です。書かれている内容を踏まえて、沖縄県民の、食生活と健康の改善に関するあなたの考えを 600 字以上 800 字以内で述べなさい。

1950 年以降の沖縄における脂肪、炭水化物、タンパク質のエネルギー比率の推移は、脂肪摂取において 1960 年から 1975 年にかけて大きく変化しており、炭水化物は反対に減少している。タンパク質は大きく変化していない(出典:略・行政機関の統計)。この 1960 年から 1975 年の期間は米国統治の後半と本土復帰の時期と重なっている。脂肪摂取のエネルギー比率の量的な変化をみると、沖縄における脂肪の栄養転換*の知見が見いだされた。脂肪摂取の栄養転換は、動物性由来の脂肪によるものであるが、脂肪摂取の変化は、食肉加工食品輸入量と豚肉の生産量の合計と一致していた(Todoriki et al. 2004)。

脂肪エネルギー比率は、厚生労働省の脂肪摂取基準の上限値である 25%を、沖縄は 1970 年前後に、全国は 1980 年前後に超え、全国は沖縄に比べ約 10 年遅れて栄養転換を迎えた(Todoriki 2004)。(問題末尾に補足のグラフあり)

(中略:本土復帰後の沖縄県単位人口あたりの外食店舗数に関する記述)

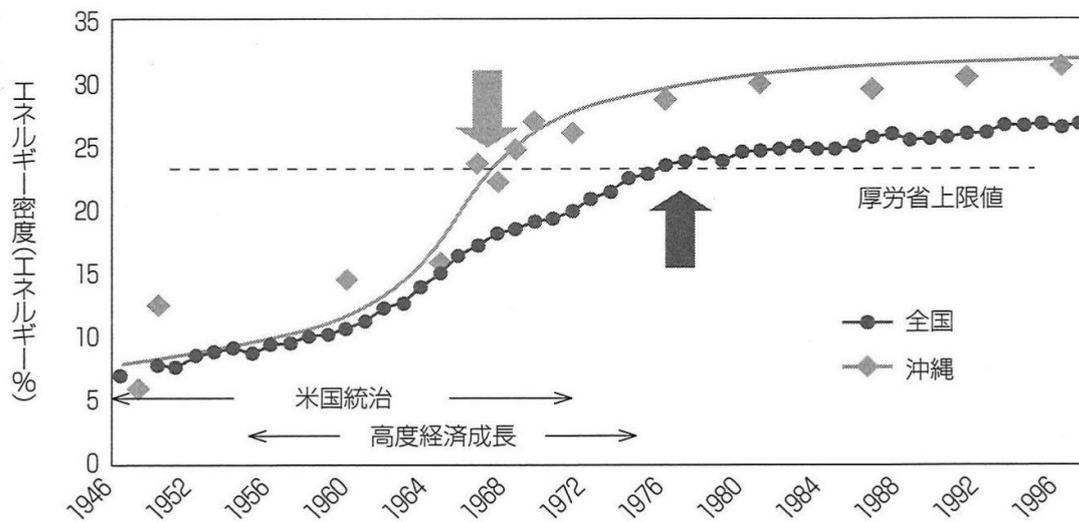
ファストフード店の推移も同様の結果を示した(図 8-5)。沖縄のファストフード店は、米国統治下では 2 店舗のみであり、利用者の 8 割が米国人であり、その他は沖縄人の富裕層が利用していた(金城他 1995)。このことから、米国統治下においては大半の県民はファストフードの利用はしておらず、復帰後の県民所得が向上してきた 1980 年代になってから一般的になったと考えられる。従って、沖縄の脂肪の栄養転換はファストフード店舗の増加の前に起こっているため、ファストフードによる影響ではなく、むしろ家庭における料理由来の脂肪摂取の影響が大きかったと考えられる。

(等々力英美「戦後沖縄における食事・栄養と食環境の変遷」『島嶼地域の新たな展望』(九州大学出版会 2014)p175～179 より抜粋)

*栄養転換:「欧米型」と言われるような高脂肪(不飽和脂肪酸)、高糖質、食物繊維に乏しい食事の摂取機会が増え、同時に身体活動の機会減少も伴い、集団の体格組成が変化する現象(日本国際保健医療学会による説明)



出題者による補足のグラフ



* 連合国最高司令官総司令部公衆衛生福祉局 (GHQ/SCAP/PHW) の沖縄関連文書データベース；琉球政府厚生局，1960-1965，1967-1970；沖縄県環境保健部，1972-1993；沖縄県福祉保健部，1998より

全国と沖縄の脂質摂取の変遷

等々力英美「戦後沖縄の体重転換と社会経済的要因」『ソーシャルキャピタルと地域の力』

p105 から引用